別紙２

論文審査の結果の要旨

西芳実

本論文は、現代のインドネシアのアチェをめぐる紛争の展開と構造を分析した論文である。アチェでは、スハルト体制の崩壊後、アチェの独立を求めるスマトラ・アチェ民族解放戦線（GAM）とインドネシア国軍の間での武力抗争が激化し、紛争の話し合いによる解決は行き詰っていたが、2004 年 12 月 26 日のスマトラ沖地震と津波の発生で、局面は大きく変化し、インドネシア政府と GAM の間での和平交渉が合意に達し、新しいアチェ統治法が制定され、それに基づく州知事選挙が行われるなど、和平プロセスが促進されることになった。本論文は、オランダによる植民地支配下に置かれて以降、スハルト体制が崩壊するまでのアチェの歴史をふりかえりながら、スハルト体制の崩壊後にアチェ紛争が激化した要因を検討し、なぜ津波がアチェの和平を促進したのかを解明しようとしたものである。

論文は、序章、本論三部、終章から構成されている。

まず序章「研究課題と方法」では、従来のアチェ研究、ナショナリズム研究、開発援助研究、港市国家論をふまえ、アチェを、外部世界と関係を結ぶことが自立を高める社会であったととらえ、アチェと外部世界を仲介する制度や人に注目しつつ、アチェと外部を結ぶ経路を独占してアチェを囲い込もうとする動きと、この囲い込みを破って自前の経路を確保しようとする人々の動きという、「経路と囲い込み」のダイナミズムでアチェ紛争の展開を分析しようとする、本論文の課題と方法が提示されている。

第一部「アチェにおける『反乱』の歴史と背景」では、植民地支配期からスハルト体制崩壊までの歴史の中でのアチェの「反乱」とされる動きが概観されている。ここではまず、「好戦的」で「反体制的」というアチェ像の根拠になっている一連の武力紛争は、アチェと外部世界との経路を独占しようとする外からの動きと、それに抵抗しようとするアチェの人々との間の紛争であったことが提示されている。その上で、アチェは外部世界と関係を結ぶことが自立を高める社会であり、独立革命期に指導者となったダウド・ブルエも、インドネシア共和国との繋がりにアチェの自立の展望を見出していた。インドネシア共和国の独立が安定した 1950 年代には、アチェをインドネシア共和国の一地方としてその自立を制約する、中央政府による「囲い込み」の動きが強まり、これに対してダウド・ブルエらは「反乱」を起こした。この「反乱」はアチェを特別州とすることで収拾されるが、スハルト体制が成立するとアチェの特異性は無視され、1974 年地方行政法以降、特別州の実態は失われた。こうした事態に対してアチェの独立を掲げる GAM の運動が起きた。このように、アチェの歴史は、その自立を求めて外部世界との新しい経路を求める動きと、そうした動きを制約し外部世界との関係を一元的に独占しアチェを「囲い込む」動きの対抗として把握できることを提示したのが、第一部である。

ついで第二部「権威主義体制崩壊後のアチェ問題の展開」では、スハルト体制の崩壊後、

ハビビ、アブヅゥルラフマン・ワヒド、メガワティという歴代政権のもとで、アチェ問題の紛争化と軍事化が進行したことが検討されている。スハルト体制の崩壊後、アチェでは人々がメディアや結社を通じてスハルト時代の国軍の非人道的行為を糾弾し、アチェの地位に関する住民投票を求める大集会など自己主張を強め、新しい外部世界との経路を様々に求めるようになった。中央政府は、こうした動きを吸収するために、アチェの自治を強化する法制定などを行うが、中央政府とアチェを繋ぐ有効な回路の設定に失敗し、結果として国軍による GAM 掃討作戦の強化が前面に出ることになった。一方 GAM は、こうした状況の流動化と国軍への反発を生かして、その勢力をいっきょに拡大する。この勢力拡大は、一方で現在のアチェ州知事をつとめるイルワンディのような人物が GAM との接点をもつなど、GAM の変質につながる遠因となったが、差し当たりは GAM の軍事活動の活発化をもたらす。かくしてアチェ紛争は、国軍と GAM という軍事勢力が、あたかも「インドネシアかアチェか」の二者択一を人々に強要するかのように、アチェを独占的に「囲い込む」べく対決するという袋小路に入っていた。こうしたスハルト体制崩壊後の紛争の軍事化が検討されているのが、第二部である。

第三部「2004 年スマトラ沖地震・津波とアチェ紛争」では、地震・津波がアチェを外部世界に対して開放する役割を果たし、紛争の平和的解決が促進されたことを検討している。2004 年暮に発生したスマトラ沖地震と津波は、国軍と GAM による「囲い込み」を突き破る役割を果たした。これは、アチェが「紛争地域」から「被災地域」にかわり、アチェを舞台とした国際的な救援復興活動が活発に展開されて、アチェの人々が外部世界と結びつく経路が飛躍的に増大したためであった。これによって紛争の非軍事化が進み、津波以前に起きていた変化が積極的な紛争解決を促進することになった。具体的には、インドネシア政府と GAM の和平合意、「アチェに系譜をたどれる者」と「アチェに居住地を求める者」双方を視野に入れ、地方政党の存在を認めるなど、従来の単一共和国としてのインドネシアの統合原理とは異質な要素を含んだアチェ統治法の制定、そして「和平の立役者」と位置づけられるイルワンディの州知事当選といった事態が発生した。このような津波のインパクトと、和平過程が分析されているのが、第三部である。

終章では、以上のような本論文の第二部、第三部での議論をまとめ、今後の展望として、アチェのイスラム化と「国民化」の行方について言及されている。

このように本論文は、ポスト・スハルト体制期の現代アチェ紛争を、それまでの歴史的経緯をふまえて分析したもので、論文提出者が紛争の推移を現地で観察した体験が生かされているが、単に紛争の展開を時系列的に追うのにとどまらず、アチェを外部世界と繋がることが自立を高める社会であったととらえ、一連の紛争を「経路と囲い込み」という角度から整理するなど、紛争の基本構造に関する独自の理解を枠組みにして検討した論文となっており、現代アチェ政治史のまとまった像を提供した独創的な業績として評価できる。

その上で、論文審査においては、いくつかの問題点が指摘された。第一は、「経路と囲い込み」という枠組みが、枠組みとしてまだ成熟しておらず、紛争の経過の分析に十分には貫

かれてはいないという問題である。枠組みとして成熟させるには、交易や流通経路に関するデータなどをもっと視野に入れることなどの努力が必要なこと、概念が成熟していない段階ではあまりこうした枠組みに固執しないほうがよいのではないかという指摘が出された。またこれと関連し、本論文では新しいアチェ史像を提示するという課題と、紛争を構造的に分析するという二つの課題が追求されているが、新しいアチェ史像の提示に徹したほうがよいのではないかという指摘もなされた。第二に、現在のインドネシアとアチェにとっての「bangsa=国民」概念の意味については、もう少し議論がつめられる必要があるという指摘があった。第三に、今後の課題ではあるが、津波と民族的紛争との関連という点では、スリランカの事例との比較なども視野に入れてほしいという指摘も出された。

しかしながら審査委員会は、こうした問題点や弱点は、今後の研究の深化の過程で克服されるべきものであり、本論文の基本的意義を否定するものではないと判断した。したがって、本審査委員会はこの論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。